

SY2-3

小児がんのこどもと考える復学支援

音 美千子

金沢大学附属病院 看護部

小児がんのこどもは約1年前後に及ぶ入院治療を余儀なくされる。この期間、こどもにとって日常生活の主要の場である学校で過ごすことを見据えた支援を入院中から行っていくことは、療養生活を支える看護師の重要な役割の1つだと考えている。＜BR＞現在、支援の1つとして、小児がんのこども、家族、学校担任や養護教諭等の教職員、主治医や看護師の医療者で、復学について共有・相談する場となる退院前復学支援カンファレンスを開催している。看護師は、病院でこどもが頑張ってきたことや強み、こどもの病気についての認識や告知状況・外観の変化や今後の治療の副作用症状等への思いを元に、どの様に自身の事を学校の生徒に伝えたいと思っているか、どの様に過ごせると良いと考えているか等、アドボケートする役割を担っている。カンファレンスの開催によって、こどもが自身の現在や今後について考えるきっかけとなり、学校生活に沿った生活リズムや学習時間の確保、リハビリに励むといった、こども自身の力が見え始めると共に、学校生活の過ごし方や、外来治療における投薬のタイミングの相談等、退院後の継続支援にも繋がっている。＜BR＞復学支援を通して、授業への参加や友達との交流等を図り、入院中早期から原籍校との繋がりを持ち居場所を確保すること、また療養の場だけでは知ることができないそのこの様子を私たちが知ることで、よりそのこの力が発揮できる療養環境を模索していきたいと考えており、今後は、退院前に限らず、入院中早期からの原籍校との連携の在り方を課題としている。退院後の外来受診時に、「体育の授業で紫斑ができ不安だった」「想像以上に体力がなく友達と過ごすことも大変」といった、小児がんのこどもが経験したことを表出してくれる声が、現在入院しているこどもの復学支援に繋がっている様に、今後も、こども・家族の声を聞き、リアルタイムにケアに反映していくことが必要であると考えている。＜BR＞本シンポジウムでは、看護師としての視点から、復学支援の現状と共に、今、こどもたちが自分の現在や今後の生活について、こどもたち自身で考えることができる支援について、様々な職種や経験者の方々と考えていきたいと思っている。

SY2-4

未来へ歩む一歩を支える～医療ソーシャルワーカーの就労支援の現場から～

前田 多見

三重大学医学部附属病院

当院は小児がん拠点病院、都道府県がん診療連携拠点病院の機能を併せもつ県内唯一の特定機能病院であり、県内のみならず、県外からも広く患者を受け入れている。平成25年、小児がん拠点病院の指定を受けて以降、それぞれの専門領域での発展や、小児がんに関わる様々なチームが設立され、各領域、専門職同士が互いの専門性を発揮しつつ、協働し患者家族サポートを行っている。私達、医療ソーシャルワーカーも医療現場の中の社会福祉の専門職として、心理・社会的な支援を行っている。小児科からの相談件数は年間延べ730件（令和5年度）ほどで、小児がん患者はそのうちの1割強を占めている。中でも、小児がん患者の就労相談件数は成人がん患者と比較し少なくはあるが、成人が抱える課題同様に、様々な困難感を抱えていることも少なくない。例えば、長期治療などにより学業が遅れたり、社会への準備ができないまま成人を迎えることになったり、同年代と比較し、職務経験が不足していることで自信がつかなかったり、親と子の関係性により自立が困難となっていたりなど、晚期合併症などの身体的な制約だけでなく、心理・社会的な側面も含んでいる。また、20歳を迎えると、これまで利用できていた医療福祉制度の対象からは外れるため、医療費の負担や保険料、税金などの支払いが家計に重くのしかかる。仕事をすることは、安定した生活の基盤を整えるために欠かせないものである一方で、その人によっては、単に経済的な自立を目的とするだけでなく、何らかの形で他者や社会に貢献していると感じることが自己の存在の意味や意義、自己成長と考えることもある。社会とつながることや、仕事をすることは、その人の人生にとって、より大きな意味をもつこともある。当院では、様々な課題を抱える小児がん患者や、その家族に対し、小児科医や看護師、長期フォローアップ外来、AYAチームなど、多職種による連携やサポートのみならず、特別支援学校や、ハローワーク、障害者相談支援センター、社会保険労務士などとの連携により、多面的かつ包括的な支援を行っている。このシンポジウムでは、事例を振り返り感じた就労の課題や支援の困難感、多職種連携の在り方などを共有し、皆さんと一緒に「未来への一歩を支える」支援体制の発展につなげたいと思う。